

令和5年8月24日
佐々木 朗

福祉のまちづくりボランティア養成研修に参加して

1 どたばなしながらも参加

私のスケジュールは全てパソコンに打ち込んである。パソコンに打ち込むとスマホも連動するし、その逆もありである。

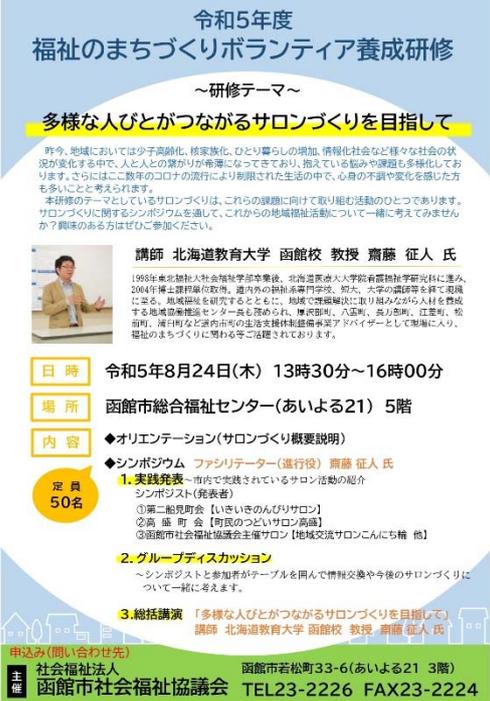
今日のスケジュールを見ると「福祉講演会 13:30 函館市総合福祉センター」となっている。そういえば、函館市の LINE で流れて来て、記入した記憶がある。気づいたのが 13:00。申し込んでいないので、間に合わなかったら仕方がない。

会場の総合福祉センター(愛称あいよる)に到着。駐車場がいっぱいで、停めるところがない。「戻るか。」その時、ちょうど一台分が空いていた。まるで私の軽トラのためのように。

受付に到着したのは、ほぼ 13:30。「お名前は?」「あら一事前申し込みが必要だったんですね。ごめんなさい。」と帰ろうとしたら、「お待ちください。参加していただいて大丈夫です。欠席の方もいるので、その方の所に座って下さい。」ということで、滑り込みセーフ。家に帰って、要項を見たら、申込先が書いてありました。

2 研修会の概要

研修テーマは「多様な人々がつながるサロンづくりを目指して」である。趣旨として近年人づきあいが希薄化している中、サロンという場を設けて、高齢の方を始め、あらゆる世代の人が楽しみや学びを



令和5年度
福祉のまちづくりボランティア養成研修
～研修テーマ～
多様な人びとがつながるサロンづくりを目指して

◆オリエンテーション(サロンづくり概要説明)
◆シンポジウム ファシリテーター(進行役) 齋藤 征人 氏

◆実践発表～市内で実践されているサロン活動の紹介
シンポジスト(発表者)
①第二船見町会【いきいきのんびりサロン】
②高 盛 町 会【町民のつどいサロン高盛】
③函館市社会福祉協議会主催サロン【地域交流サロンこんにち輪 他】

◆2. グループディスカッション
～シンポジストと参加者がテーブルを囲んで情報交換や今後のサロンづくりについて一緒に考えます。

◆3. 総括講演 「多様な人びとがつながるサロンづくりを目指して」
講師 北海道教育大学 函館校 教授 齋藤 征人 氏

日時 令和5年8月24日(木) 13時30分～16時00分
場所 函館市総合福祉センター(あいよる21) 5階
定員 50名

申込み(問い合わせ先)
主催 社会福祉法人 函館市社会福祉協議会 函館市若松町33-6(あいよる21 3階)
TEL23-2226 FAX23-2224

共有し、地域活動を活発にしていくということである。今回の研修は、この実践に向けてのボランティアを養成するということである。社会福祉法人函館市社会福祉協議会の主催である。

代表者の挨拶で、見たことのある名前。挨拶の内容はそっちのけで、40年以上前の私の覚えている面影を重ねてみたが、どうも重ならない。休憩の時に、思い切って、「もしかして、教育大のご出身ですか。」「昭和〇年卒業ですか。」ここでピンときたようだ。「〇〇の授業で一緒にさせてくださいました。」というようにご挨拶をさせていただいた。私は教員として、彼女は市役所職員として過ごし

たということがわかった。

さて、函館市社会福祉協議会は、行政と連携しながら、地域の人々が住み慣れたまちで安心して生活することができる「福祉のまちづくり」の実現を目指して活動を行う組織である。

今回のサロンも各地域の有志が企画し、同福祉協議会と連携し、高齢者を中心とした地域の人たちの生活を豊かにすることを目指して実施、また今後計画されていく事業である。

3 実践発表

研修会では4名の方の実践発表があった。

船見町の「いきいきのんびりサロン」は、令和3年の設立、脳トレ、体操、あやとりなどの活動を行っている。来てもらって楽しんでもらうことを主眼にしている。会議室の後ろには参加者が作った作品が陳列されていた。きっとやり出したらみんなん夢中になってやるんだろうなあということが想像できた。

高盛町の「町民のつどいサロン高盛」は平成4年のスタート、高齢者が多い一方、今年度地区からの小学校への入学は一けた台という地域である。外出もなく、閉じこもっている高齢者が多いということである。活動としては、郵便局、警察、介護職員、地元の更生施設などの勉強会を中心に活動してきた。参加者の皆さんの「居場所になればいい。」という言葉が心に残った

榎法華(旧)の「とどっ子塾」は、小説の読み聞かせ、体操、世の中の動きなどの勉強会などの活動を行っている。推進者

令和5年度 福祉のまちづくりボランティア養成研修 カリキュラム

日 程	カリキュラム・内容
13時30分	開 会
13時40分 ～14時00分	オリエンテーション 事業説明 「地域づくり支援事業 サロンづくりの概要について」 説 明：社会福祉法人函館市社会福祉協議会 事業部 事業課 地域福祉係
14時00分 ～16時00分 (休憩10分)	シンポジウム ■研修テーマ「多様な人びとがつながるサロンづくりを目指して」 講師・ファシリテーター(進行役) 北海道教育大学 函館校 教授 齋藤 征人 氏 1. 実践発表(45分) ～市内で実践されているサロン活動の紹介 【シンポジスト(発表者)】 (1)第二船見町会(いきいきのんびりサロン) (2)高盛町会(町民のつどいサロン高盛) (3)函館市社会福祉協議会主催サロン 2. グループディスカッション(20分) ～シンポジストが各グループに入り、活動に対する質疑応答や 情報交換等を通してサロンづくりについて一緒に考えます。 3. 総括講演(45分) ～グループ内の意見発表や研修全体のまとめとして講師より ご講演いただきます。
16時00分	閉 会

のリーダーシップが輝いている感じがした。またとてもいいなあと思ったのは地元の小学生との防災教育の交流会であった。

上野町の「地域交流サロンひなたぼっこ」は、工作や、レクレーション、童謡かるた等の事業を行っている。中でも海外の方との交流の事業が目をつけた。内閣府の事業であるが、社会福祉協議会と連携することで、大きなプロジェクトも引っ張って行くことができる事を学んだ。

汐首町「わくわくサロン」は、DVDを使った体操や保健師を呼んでの健康の話、バイタルチェックなども行っている。レクレーションも楽しそうであった。

銭亀沢「いきいきサロン」では、工作や脳トレ、茶話会などを行っている。私の住む望洋団地とどのような連携になっているのかが気になった。

福祉センター「地域交流サロンこんに

ち輪」では、出前講座や季節のお菓子作りなどを行っている。短大生に来てもらったり、また、地元の住民との交流なども積極的に進めたりしている。学生がいるだけで華やかさが増す。

4 ディスカッション

飛び入り参加の私も、グループの仲間に入れていただき、ディスカッションに参加した。今まさに、明後日の土曜日にサロン第一回を開催する日吉南団地自治会から話の口火が切られた。「集まるだろうか。やるだけはやったけど。」自治会役員にもだいぶ呼びかけたが不安でしょうがないということである。

やるところまでやったんだから、人は付いて来るんじゃないかあと思う。また、もし、人数が少なかったとしても、やった結果をまとめ、地域に返してあげること、次回が見込めるのではないかと思った。

予算、負担感、推進者などの話が出た。お金については頼れるところは頼った方がいいと思う。お金は有効に使われれば、それが本望であると思う。「負担感。」これは、永遠の課題なのかもしれないが、自分自身の反省を振り返ってみると、かなりの時間、私がやらなくてもいいことを私がやって、事業を展開してきた人生であった。でも私は負担とは思ってなくて、むしろ、楽しい思い出いっぱいできたかなあ、そして、自分の引き出しがどんどん増えて楽しいなあという思いである。言われてやると楽しくない。自分がやる気になってやるのは楽しい。負担ではない。心の切り替えなのかなと思う。

そして、いつまでもリーダーシップを独

り占めしないということも考えている。常に一緒に運命共同体になってくれる人を見つけ、その人に、事業の中心になって企画することの楽しさを伝えていけるようにすることが大切だなあと思った。

あと、マスコミを使いながら、事業をPRしていくことも、周りの関心を引き起こすことにつながるのではないかなどという話もした。

5 講師のまとめ

北海道教育大学函館校齋藤征人教授

やり方はいろいろあるがあんまり考えすぎずにとにかく一度やってみよう。やりながら次を考えていくというのも一つの考え方であろう。

全部自分でやろうとせずに、使える施設や業者、無料で来てくれるところなどを探し、時間を「お任せ」するのも一つ。

新たな行事を組み立てていくのは、最高に楽しい。

障がい者との連携も大切である。障もある意味一つの個性としながら、共に楽しみを共有することも大切。

学校には、総合的な学習の時間があり、探究的な学習が求められている。これと、サロンは見事にマッチングする。学校への働きかけなどもやってみたらいい。

6 まとめ

感激したのは、函館市の社会福祉コーディネータに大学生がいたということである。彼女に会が終わった後話しかけたところ、私の後輩(教育大)であり、将来は社会福祉士を目指しているとのこと。若い力を積極的に活用させようとしている

社会福祉協議会には大きな拍手である。

全国的に見ると町内会活動の高校生を登用している地区もあるという。若い、そして純粋なものの考え方に耳を傾けることは大切なことだと思うし、若い方がいるだけで、活動が華やかになるのは言うまでもない。

私は、教員生活を通して、「その地域に住む」ということを大切にしてきた。「地元の先生」であることを大切にしたい。町内会活動、自治会活動にも結構参加したし、まあまあ、あてにされることもあった。管理職になり、檜山に転勤してからは、町内会運営に直接携わる機会もあり、企画立案もするようになった。学校の仕事を離れての活動であるが、地域の人材として子どもをどう使っていくかということは常に頭にあった。ある町にいた時、お年寄りの集まりに受け持ちの子どもたちを連れていき、ハンドベルや学習発表会で行った落語の演劇をさせたら、お年寄りたちは涙を流して喜んでくれた。すべてが私の自治会活動のノウハウが詰まった引

き出しになった。

高齢者の楽しみ、そして、これからの時代を生き抜く、コラボレーションが私は大切だと思うようになった。今回の研修でも、サロンという場を子どもたちと高齢者の交流の場にコーディネートすることができれば、最高の場ができるのではないかと思った。

自分が若い時に考えた60代は、いわゆるおじいちゃんと思っていたが、今自分がその年を生きてきて、まだまだ頭もある程度働かし、物事も考えられる、体力もまだまだある。そして、何より現役時代に比べると時間がある。

自分の時間をどう過ごそうが、それぞれの人の勝手である。でもせつかくの人生であるので、毎日がドキドキわくわく、刺激のある楽しい毎日を過ごしたい。

やっぱりいろんなところに顔を出して「学ぶ」ということは楽しいことなんだなあと思った。今日は「正解」の一日だった。

2023年8月24日 まとめ 佐々木 朗